

# 村のチカラ

## 5 現代の民話「100人村」

世界を一つの村にたとえ、貧困や戦争などを分かりやすく解説した本「世界がもし100人の村だったら」(マガジンハウス)。二〇〇一年の米中核同時テロをきっかけに出版され、ベストセラーになった。

数字の根拠を解説したり、世界の子どもが直面する危機を報告したりする続編も次々登場。第四弾までで計百六十万部を突破した。編者でドイツ文学翻訳家の池田香代子さんは、「村」という人間の社会的基本的単位を使うことで、誰もが親し

## 基本的単位に親しみ

みを感じる「現代の民話」になったと考えている。

「村」は貨幣抜きでも成り立つ自給自足的な生活共同体のイメージがある。しかも、百人というのは直感で想像しやすい世界。

『町』ではこれほどの共感呼ばなかったと思います」



自宅隣の空き地を借りて、畑仕事に精を出す池田香代子さん(東京都杉並区)

核平和を訴える学者や知識人でつくる「世界平和アピール七人委員会」のメンバーになり、憲法九条の重要性を強調すること、あちこちに村的な共同体がでないか。そんな夢も抱く。

本は子ども編で一区切りと考え、翻訳に専念するつもりでしたが、国連人口基金と出版社から第五弾の企画を持ち掛けられた。テーマは、人口の急増に伴い悪化している、開発途上国の都市化問題。「貧困と飢餓の半減」など、国連が設定した目標の達成を予定する二〇一五年までに、各国の人々が取るべき具体的な行動を示唆する内容にする計画だ。今年末の出版に向け、執筆に取り組む。

# ベストセラー続編次々

印税は税金を除き、ことは、人類が生きて延「100人村基金」とびるのに欠かせない幸名付けてプール。アジセの記憶が奪われることアや中東の難民支援、と」と思うからだ。

貧困層の生活向上などに池田さんは一九四八年、東京都杉並区生まに取り組む団体や個人に寄付してきた。総額は三千五百万円を超えている。

池田さん自身の活動呼ばれていた。隣近所の舞台も広がった。反の付き合いも濃密だった。

タイトルは「2015年世界がもし100

「世界がもし100人の村だったら」の続編の取材で、最近、自宅隣にある、かつて畑だった空き地を借りた。硬くなった土をこるいにか、耕作に適した状態

影) (写真家の小野庄一さん撮った) 〓おわり

